



# candle service 2024

## キャンドルの灯りに 初心を込めて

キャンドルサービスとはナイチンゲールがクリミア戦争において、夜もランプを持って人々を励まし看護にあたっていたことから、看護の初心を忘れないために行っている行事です。当院のキャンドルサービスの始まりは今から66年前にさかのぼります。昭和33年、グループの本院である板橋中央総合病院が、入院患者様に少しでも喜んでいただけたらと、10人ほどの看護師がお金を出し合ってささやかに始めたものです。今年もその温かい思いを受け継ぎ、医療従事者一人ひとりが自らの誓いを胸に、患者様の健康と回復を祈りました。患者様一人ひとりの心に届き、希望の光となることを願っています。



職員  
の代表が  
キャンドルの灯りに誓いを立てます

### 灯の誓い

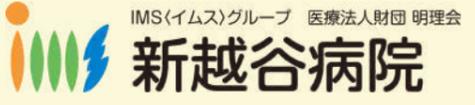
これからも感謝の気持ちと謙虚な姿勢を忘れず看護をしていきたいです。患者さん一人ひとりがそれぞれの向かう目標に向かって頑張っている姿をこれからも一番近くで支え、笑顔で退院できるように精進していきます。

回復期病棟担当 1年目 看護師

## ACCESS

- JR武蔵野線  
「南越谷駅北口」より約10分
- 東武スカイツリーライン  
「新越谷病院西口」より約10分
- 東武スカイツリーライン  
「越谷駅西口」より約10分

当院ホームページ



休診・代診情報は当院ホームページから確認できます



Vol.10

IMSグループ 広報誌 プラザイムス

# しんこし

新越谷病院広報誌

「プラザイムス」は、患者様、ご家族のみなさまに院内やIMSグループの医療活動、病気に関する情報をお伝えするコミュニケーションペーパーです

## 2025

皆様には、健やかに新春を迎えられたことと、お慶び申し上げます。

新越谷病院は移転に向けて地域包括ケア病床開始等の新しい試みを粛々と進めております。急性期病院からの患者受け入れを強化し、また、サブアキュート機能としての在宅や施設からの緊急受け入れを増やし、地域包括ケアシステムを支える重要な役割を担う多機能型病院を目指していきます。

去年は在宅部門も含めた多職種の円滑な連携のおかげでスムーズな病院運営を行うことができました。患者様にとってよりよい医療を提供していくには、今後はさらにスピード感を持って共有された情報を処理していく必要があります。

病院はどんどんバージョンアップしていきます。私たち職員もバージョンアップして新病院移転に備えていかなければなりません。



院長 長谷川 正治

今年の干支は乙巳です。乙巳には「努力を重ねて、物事を安定させていく」という意味があり、当院にとって縁起の良い年です。地域に支持され、患者様、ご家族様から選ばれる病院となるように職員一丸となって進めていく所存です。

本年もご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。

新年あけまして  
おめでとうございす

広報誌についてのご意見ご感想・取り上げて欲しい内容・当院への要望  
移転についての聞きたいこと、要望など、皆さまの声をお聞かせください！

アンケートはこちら



Contents

- P1.
- P2~3.
- P4.

新年のご挨拶  
回復期病棟 多職種対談  
イベントレポート (キャンドルサービス)

多職種が  
ひとつになってつくる

あたたかい

# 「第1の家」



当院の回復期リハビリテーション病棟では、患者さんが一日も早く自宅での生活に戻れるよう、多職種のスタッフが連携しきめ細やかなケアと手厚いサポートを提供しています。チーム医療の要となる「多職種連携」の現場の声を伺いました。

**司会**：正門先生が着任されて半年が過ぎましたが、何か変わったことはありますか？

**川口**：まず、リハビリの専門医である先生が来て下さったのは大きいです。装具や新しい機器についても詳しいので、患者さんに合わせたリハビリをよりできるようになりました。あとは、以前よりも活発にコミュニケーションを取るようになり、多職種連携がスムーズになったと感じています。

正門先生は、普段からリハビリルームに顔を出して若いスタッフにも積極的に話しかけてくださいます。先生自ら寄り添って話を聞いてくれるので、距離感はとても近くなりました。

印象に残っているのは、カンファレンスの際、必ず最後に「皆さんの意見はどうですか？」と聞いて下さるんですね。意見を言いやすい雰囲気を作ってくださいるので、とても働きやすくなりました。

**風間**：そうですね。正門先生は、医師だけでなく、看護師、リハビリスタッフ、ソーシャルワーカーなど、それぞれの職種の専門性を大切にしてくださいます。以前は、職種間の壁を感じることもありましたが、今は、チームとしての一体感を強く感じています。

**正門Dr**：みんなで一緒に歩いてるっていう、そういうイメージなので、みんなで患者さんと家族にとってベストなところを目指していきたいですね。

活発になったコミュニケーション、  
高まるチーム力

**司会**：先生は回復期リハビリテーション病棟の現状についてどうおられますか？

**正門Dr**：患者さん一人ひとりに合わせたプログラムを通して、質の高いリハビリテーションを提供できていると感じています。

回復期リハビリテーション病棟はリハビリを主体にやるんですが、それをリハビリの時間以外にもやる。訓練でやったことを病棟で実践することが大事です。つまり、病棟は患者さんにとって“第1の家”なわけです。自宅と同じように食事や入浴、着替えなど自分のできることを増やしていく。看護師やリハビリスタッフと訓練したことが本人に伝わり、できるようになっていくプロセスがすごく重要なことなんです。

## 「第1の家」から、笑顔で自宅へ

**司会**：看護師として、患者さんとの関わりで大切にしていることは何ですか？

**風間**：患者さんに寄り添い、心身両面のケアを行うことを心掛けています。正門先生が着任されてから、病棟内のコミュニケーションが活発になり、多職種連携がスムーズになったことで、看護師としても何ができるだろうと少しずつ意識が高くなってきたように感じます。たとえば排泄に関して、おむつをしている患者さんがいたとしたら、おむつの種類を変えたり、昼と夜で対応を変えたり、少しでも快適に入院生活が送れるよう心がけています。そういったことをチームで話し合うことが増えたというのがとてもいい変化ですね。

**司会**：カンファレンス以外に何か多職種での取り組みはありますか？

**正門Dr**：ワーキンググループがあるのは排泄ケア、栄養管理について。薬剤師や管理栄養士も一緒に取り組んでいます。

**司会**：深井さん、ソーシャルワーカーの立場から、患者さんのニーズってどんな風に感じますか？

**深井**：そうですね、患者さんやご家族の方とお話していると、ADLの中でも特に「トイレだけは自分で行きたい、行けるようになってほしい」という希望を、皆さん強く持っていらっしゃるんです。正門先生がおっしゃっていた、排泄ケア、栄養管理、リハビリテーションを組み合わせたケアっていうのは、まさに患者さんのニーズに合致した取り組みだと思います。入院費用とか退院後の生活のこととか、患者さんやご家族が不安に思っていることを解消して、安心してリハビリに集中できる環境を作るのが、私たちの仕事ですね。

**司会**：正門先生、今後はどんな風に病棟を運営していきたいですか？

**正門Dr**：そうですね、この病棟が患者さんにとって安心して過ごせる「第1の家」となるよう、温かい雰囲気づくりを大切にしながら、質の高いリハビリを提供していきたいと考えています。病棟スタッフ全員が、「もっとできることはないか」常にわからないことは勉強する向上心を持つことが大事です。個々の力は大きいですがね。当院のスタッフは優秀な方ばかりなのであとはいかにコミュニケーションがとれるかどうか。偉そうなことを言うと、タクトを振る立場としてはそうすれば楽にタクトを振れる（笑）



回復期病棟 看護師  
風間 師長



回復期病棟 医師  
正門 由久 副院長



医療相談室 社会福祉士  
深井 主任



リハビリ科 理学療法士  
川口 係長

## 目指すは日本一の リハビリテーション病棟

ここがゴールではないので、日本一のリハビリテーション病棟を作っていきたいですね。

### おわりに

回復期リハビリテーション病棟では、専門性を尊重した多職種連携を強みとし、チーム一丸となって患者さんの社会復帰を支援しています。今後も、患者様一人ひとりに寄り添い、質の高い医療・ケアを提供できるよう、努力を続けてまいります。このような多職種での取り組みは回復期リハビリテーション病棟だけでなく、病院全体に新しい風をもたらしています。

